

喪失体験後の人生を生き抜く過程と二つのタイプ
- 重大事故被害者遺族の語りから -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
濱矢 洋子

自然災害や大きな事故は突然に大切な人の命を奪い、大きく深い苦しみや悲しみを遺族にもたらす。このような、身近な大切な人の突然の死はトラウマ反応をおこす可能性があり、そのトラウマ反応からの回復には、治療を受けて回復する場合と、治療を受けずに回復する場合があるといわれている。しかしながら、現在、約75%の人は、喪失体験後に専門家による治療を求めないといわれているにもかかわらず、日常生活の中でどのように回復しているか、その過程はいまだ明らかにはされていない。

以上のことから、本研究では、治療を受けずに被害後の人生をどのように生きているのか、その「人生を生き抜く過程」を明らかにすることを目的とする。その際、重大事故の遺族を対象とする。さらにその上で、遺族への具体的な支援の方法を考えていくための手掛かりを得たいと考える。

研究の方法は、重大事故により、20年以上前に配偶者を亡くし、現在60歳代以上である遺族2名（男女各1名）を対象とした。研究協力者は2名共に、これまで専門家に心理的な治療を受けていなかった。インタビューの前には十分なインフォームドコンセントを行い、心身の状態をアセスメントするためにCMI健康調査表を実施した。インタビューは、研究協力者一人に1回が1時間から1時間半で、それぞれ2～3週間の間隔で3回実施した。研究協力者の許可を得て、ICレコーダーに録音し、その後、逐語記録とし事例研究法で分析を行った。

その結果、研究協力者2名の事故後の過程には明らかな違いがあることがわかった。そのため、その違いを明確にするために5つの観点を設け、分析した。

その分析の結果、Aさんは「関心が絶えず外に向いているタイプ」であり、社会の仕組みや制度を変えるための運動を活発に行い、そのことに生きる意味を見出し、一方、Bさんは「関心が自分の内側・内面に向くタイプ」であり、宗教を心の安らぎとし、自分自身を見つめることを生きるための中核においていることがわかった。この研究協力者2名の違いを理解するために、喪失体験後の過程をユングのタイプ論を手掛かりに見ていくと、Aさんは「外向型」であり、Bさんは「内向型」と考えられ、喪失体験後の人生を生き抜く過程には、2つの異なるタイプが存在することが示唆された。さらに、それぞれのタイプの異なる過程を経て、新たに生きていく「意味の再構築」が行われ、喪失体験後の人生を生き抜いていることが明らかになった。また、本研究では、周囲の人が喪失体験者のタイプを理解し、そのタイプにあった支援をすることが有効であることが示唆された。